

江戸期、越谷発展に努めた名主

会田家の起源は？

「信州出身に違いない」 実地調査で自信強める

昭和五十一年十二月三十一日 毎日新聞

約三百年前から越谷市の発展に大きな足跡を残しながら、その成り立ちが解明されないまま越谷郷土史の謎とされていた「会田家」について、このほど同市のアマチュア歴史研究家が「信州出身に間違いない」との説を打ち出した。遠く長野まで足を伸ばしての調査だけに、同市の郷土史家も注目。歩調をあわせて研究を進めることになっている。

なぞに挑むアマ歴史研究家

解明へ 郷土史家も協力

これまでの同市史によると、会田家は江戸時代の初めから明治維新までの約二百年間、名主として同地方一帯を支配、荒川べりで新田を開発、同地を江戸の穀倉地としたり、日光街道有数の宿場町に整備した。いまでも五十音別電話帳で同市内

の会田姓は二百二十戸もあり、「会田」を屋号とする商店も多い。

ところが同家の本家は、大正時代、静岡県に移住してしまい、資料も断片的で、市史でも同家の起源は「多分、小田原北条の家臣ではないか」とあいまいに片付けられている。

「同市は、東京のベッドタウンとして、人口が今後ますます増えるばかり。このためいま同家の正確な歴史を調べないと、永久の謎になってしまふ」と考えたのが、同市弥生町一二の七、菓子販売業、山崎善司さん（五〇）。山崎さんは同市生まれで、子供のころから歴史が大好き。越谷市郷土研究会員として、今でも暇を見つけては、市内の旧家を訪ね、蔵に眠っている古文書を読ませてもらうのが趣味。

今年の夏、たまたま古文書探しで立ち寄った同市新町二、貸家業、会田圭さん（五〇）から「死んだ祖父が、先祖の墓参りといって長野県東筑摩郡四賀村へよく足を運んだ」という話を聞いた、百六十年前の文政年間に書かれた越谷地方の郷

土歴史書「瓜の蔓」の中に「会田家は天正（一五七〇年代）のころ越谷に来た」ということが記されているのを知っていた山崎さんは「長野に行けば、何か手がかりを得られるかも」と思い立った。そして、このほど会田家の墓がある西賀村の広田寺を訪れ、過去帳や由来書などを入念に調べたり、同村の郷土史家と懇談した。

その結果、鎌倉時代中期、信濃国中央部の豪族だった海野幸継の次男幸持が当時、会田と呼ばれていた四賀村に移り、姓を会田に改めたのが起り。同寺に残る会田家系図によると、その後約三百年・十二代にわたって同地を支配したことになる。

だが、天文二十二年（一五五三年）、会田家は上杉謙信に味方して武田信玄を討とうとしたが、逆に滅ぼされ、上杉勢の一員だった岩槻城主の太田三楽斎資正（江戸城を築いた太田道灌の子孫）を頼って、埼玉に落ちのびたという。

会田家が「瓜の蔓」など越谷の郷土史に現れる天正年間は、それから約二十年後のことだが、山

崎さんは「信玄の追手が来ることを恐れ、資正のもとで静かに身をひそめていた。しかし、徳川の天下となったため越谷に移り、信州での政治手腕を再び発揮するようになったのでは……」と推理した。

山崎さんは近く、この調査をまとめ越谷市郷土史研究会で発表するが「現在、四賀村でも村史編さんの中で会田家の研究が行われており、この進展で私の調査がはつきり裏付けられることだろう」と自信満々。

また、同市文化財委員の木村信次同市立図書館長も「会田家史を調べている人は市内でも多いが、長野県へ『実地調査』したのは山崎さんが初めて。謎が多い会田家だけに、山崎さんの研究は大変価値がある。私もその解明に協力したい」と話している。



山崎さんが会田家史の資料を手に四賀村で話している